Vol.．122　中国の旅から　Ｐ art Ⅱ～日本のゴミ戦争～　平成 19 年 10 月 25 日)

今や世界の需要を賄う大中国ですが、リスクとしての廃棄物、大気汚染、たれ流しが心配されています。上海上空から見下ろした長江の川口から沖合数十キロまで黄濁して、海の色が変わっていました。機内で見た経済誌に翌々日むかう蘇州は、富士ゼロックスがアジアにおける自社製品の回収リサイクル施設を稼働させてすでに５万台、91千トンの処理をして、今期は黒字になったと書かれていました。

中国国内で生産販売する外国メーカーは、生産過程で環境トラブルを起こすと実名を公表され不買運動へと連動する危険性が多いからといわれています。

日本は環境保全、ごみ処理では最も先進国でありますが、今まではごみの廃棄、焼却による埋め立て、汚染が国家的課題となり、分別、再利用のリサイクル効果によって廃棄の埋め立ては従来の３０％まで縮小することができました。君津でも古いゴミ焼却工場も停止となりました。帰国後、日経ビジネス、ダイヤモンド誌などを読み漁ってみますとゴミ世界の裏側が大きく変った事に驚かされました。

①今まで生産と消費大国であった日本では出来るごみをどう少なく、如何に再利用するかが自治体の厄介な金を喰う課題でありました。

特に中国は近年１０％近い経済成長によって世界的な原料、資源不足となり価格が高騰しました。そこで中国が目をつけたのが日本のゴミを非常に安いコストで再利用を始め、今では日本のゴミの争奪戦が中国を中心に中近東まで広がっているようであります。

②たとえば通常焼却では大気汚染で最も嫌がられるプラスチック廃棄物の主役のペットボトルは協会側が今まで１トン当たり 77,100 円の処理費用を支払って来ましたが、今では大逆転して１トン４万円近い値段で売れるようになった。

家電業界もデジタル化によって年 24,000 万台くらいの廃棄が懸念されていましたが、50％は裏ルートで輸出されているようであります。

自動車を含めた鉄屑、古紙、衣料、廃プラ等はゴミの山から宝の山へと変わったといわれます。女性下着のインナー、パチンコ台は廃棄物の王様であり、あの硫酸ピッチはなぜか北朝鮮へと売れるそうです。バーゼル条約では廃棄物の輸出入は禁止されていますが、中古品、スクラップならいいという盲点をつかれています。裏街道によるごみの輸出は、今や廃プラ 120 万トン、鉄屑 700 万トン、古紙 3,500 トン、廃家電 1,200 万台等と日本の総輸出量の１０％近いと書かれております。日本のリサイクル制度は、国、地方自治体に補助金を合わせると１兆円と言われる税金を使って処理施設、事業につぎ込んできましたが余りにも高コストとなってしまったリサイクル事業に早く気が付き、先見性を持たないと巨大化する裏社会のゴミ流通産業によって日本のリサイクルシステムは大きな矛盾を孕むことになりそうであります。